三鷹市立南浦小学校　令和8年度【国語】授業改善推進プラン

	前年度授業改善推進プランの検証	学習状況の現状と課題	指導方法の課題と授業改善策
第1学年		○聞く・読む・話す・書くなどの活動を分けて取り組むことで、集中力が高まり、意欲も増した。 ○話の内容を理解するうえで役割演技や動作化したことは、子どもの意欲を高め効果があった。 ○平仮名の字形を整えて丁寧に書くようにする。 ○促音、拗音などの表記を完全に習得できるようにする。	○1単位時間を細分化し、集中して取り組むことができるように多様な活動を取り入れる。 ○視覚資料、役割演技といった動作化などの学習活動を効果的に取り入れ、文字言語の理解の助けとする。 ○話し方や聞き方の指導をしつつ、ペアや少人数グループで自分の考えを話したり、相手の話を聞いたりする活動を取り入れる。 ○文字や文章を丁寧に書くように習慣付けさせ、その活動時間を十分に確保する。
第2学年	○1単位時間を細分化し、集中して取り組むことができるように多様な活動を取り入れた。 ○話し方や聞き方の指導をしつつ、ペアや少人数グループで自分の考えを話したり、相手の話を聞いたりする活動を行った。 ○文字や文章を丁寧に書くように習慣付けさせ、その活動時間を十分に確保した。 ○音読では、言葉が曖昧にならないようにはっきりと読むことを指導をした。 ○読書の習慣が身に付くように週１回の図書の時間を確保した。	○図書や読み聞かせを楽しみにしていたり、読書の時間や休み時間を活用して本を読んでいたりする児童が多い。 ○漢字の学習に積極的に取り組み、言葉集めを通して多くの語彙を知ろうとする姿勢が見られる。また、ことわざや慣用句などに対して関心を広げている。 ○話を聞く姿勢に課題がある。「前に立っている人が、自分たちに向けて話している」という感覚が乏しく、話している人に目を合わせなかったり、手遊びや近くの友達と話したりする姿が見られる。 ○考えたことを言語化することが難しく、学習のまとめを「よかった。」「できた。」といった一言でしか表現できない児童が多い。	○聞くときのルールを明確にして、掲示したり、その都度指導したりすることで、確実なルールの定着を目指す。 ○音読指導や場面の読み取りなど、文章と向き合う時間を確保することで、文章から情報を読み取り、自分の考えを形成できるような授業計画を行う。 ○漢字指導の際の言葉集めや、日記を活用した文章作りなどに取り組ませることで、語彙を増やし、主語や述語を意識した文章へと書き方を指導していく。
第3学年	○話している人に注意を向けて聞けるように指導していることで徐々に話の聞き方が定着してきている。 ○文章と向き合う時間を授業中に確保することで、文章から情報を読み取れる児童が増えた。 ○漢字指導の際の言葉集めや日記を活用した文章作りなどに取り組んでいるが、語彙や表現が豊かな児童は一部にとどまっている。	○自分の事として話を聞くことができていない児童が多くいる。 ○板書されている漢字を、ノートに平仮名で書いてしまったり、誤った形で書いたりしている児童が多くいる。 ○読解に課題のある児童がいる。活字に触れる機会を増やし、問いの文を正しく読む力を伸ばす必要がある。	○話す前に、話を聞く姿勢が作れているか繰り返し指導するとともに、資料を視覚的に提示したり、問いかけを入れたりすることで主体的に話を聞けるようにする。 ○漢字指導の際に正しい形で書けるよう時間を十分に確保し、丁寧に書く習慣を身に付けさせる。 ○読解の場面では、キーワードに印を付けたり、問いや考えの根拠となる部分に線を引いたりするなど、文章から情報を読み取りながら読むことができるよう指導する。
第4学年	○「目・耳・心」で聴くことについて学年で共有し、年間を通して指導をした。 ○作文や振り返りなどで、正しく漢字を書くように指導を行った。 ○自分で書いた文章を声に出して読んだり、お互いの文章を読み合う活動を行ったりすることで、よりよい文章の書き方を学ぶことができた。 ○図書の時間や朝の時間を使って、本に親しむ時間を増やした。時間を確保しても読むことが苦手な児童もいるため、学習漫画も活用して、活字に触れられるようにした。	○漢字の小テストではよくできても、50問テストができない児童が多い。 ○日記を週１回で書くことで、自分のことを表現する力が付いてきている。 ○たくさん言葉をつなげて長文にしてしまったり、何を書いていいか分からず短文になってしまったりと、書く力への課題がある。	○学んだことが定着するように、小テスト以外にも、ミライシードを使って習った字を復習する時間を作る。 ○日記指導を継続して行う。また、どのような日記を書いているかを共有することで、多様な文章を書けるようにする。 ○長文になってしまう児童には、書いた文章を読むように指導する。何を書いていいか分からない児童には、どう思ったかを問い、言語化させ、それを文章に書くように指導していく。
第5学年	○友達と意見を共有し、その意見のよいところを取り入れながら自分の考えを広げる活動を行った。 ○学習計画を児童と一緒に考えて作ることで、児童が学習問題とそれにつながる授業のめあてを意識して学習に取り組むことができるようにした。 ○初め・中・終わりや場面などのまとまりごとに、短い文章で表したり、文章の要約・要旨を書いたりする練習を行った。	○自分の考えや報告書を書く活動では、事実・感想・意見を区別できずに混同して記述する児童が多い。また、推敲の習慣や技能が不十分であり、文のねじれや誤りに気付かないまま書き進めてしまう傾向がある。 ○要旨を書く活動では、事実と意見を区別して、文章構成を捉えて書くことができる児童がいる一方、難しさを感じる児童も多い。筆者の主張が強く表れている文を探すように促したり、話型・穴埋めシート等の手立てを行ったりした。 ○作成した意見や感想をスライドやドライブで共有することで、友達の表現のよさに気付いて伝える姿が見られる。ICTの活用により、書くことに抵抗感のある児童も前向きに取り組むことができている。	○書く活動で、推敲するポイントを確認し、下書きの時点で誤りに自ら気付いて修正できる状態を目指す。 ○文章のまとまりや段落ごとに、事例、理由、筆者の考えなどを明確にしながら、大事な部分をまとめる活動を全員で行ってから個人で要旨や要約を行うようにする。 ○ICTを活用して友達同士でアドバイスを送り合い、アドバイスを受けて自分の文章を修正できるようにする。どのようなアドバイスを伝えればよいかわからない児童に対しては、そのまま使える例（文例）を示して補助する。
第6学年	○相手の話を最後まで聞こうとする姿勢が見られる。周りの環境や、話の内容によって集中が途切れてしまう課題がある。 ○教師が示す型を基にして書くことに慣れている。最初の一文が浮かばず止まることもある。 ○日常の中で、自分のことを表現したり、考えたことを書いたりすることができている。漢字の定着にはばらつきがある。	○相手の話を最後まで聞こうとする姿勢が多くなった。ただ、一度集中力が途切れたあと、再び集中することが難しい。 ○日記を書くことを通して、自分の思っていることや日々の様子を書き表すことができるようになってきている。	○説明文などの読解において、接続詞や指示語に注目させ、段落の関係性を視覚化する指導を単元ごとに行う。文と文、段落と段落をつなぐ言葉の働きを理解させる活動を通して習得し、視覚化した資料を基に、筆者の主張がどこにあるのか、ペアで説明することで活用を促す。 また、つまずきのある児童には短い段落でのドリルを活用したり、机間指導をしてその都度理解しているか確認したりする。理解ができている児童は別の文章と比較して考えさせる。 ○文章を読み、文字数を決めて要約させる活動をする。また、その後に互いの文章を見合い、どんな言葉が入っていると分かりやすいかを話し合う。